三角関係はレモンスカッシュ味

五十嵐　柊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
三角関係はレモンスカッシュ味

【Ｎコード】
Ｎ３２３４Ｍ

【作者名】
五十嵐　柊

【あらすじ】
三角関係／恋愛／雰囲気小説

「でさでさー！　あいつのシュート、綺麗な孤描いてゴールに吸い込まれていくの！　なんていうんだっけ、あれ、スリーポイントっていうの？　すごくない、すごくない？」

綺麗に染めた明るい茶髪を元気に揺らして、彼女はストロベリーアイスクリームに突き刺していたプラスチックのスプーンを自分へ向けた。整った顔に小さなえくぼを刻んで、そりゃあもう嬉しそうに笑う。一言言うたびにプラスチックのスプーンを上下に揺らして、ころころと表情を変える。

大分落ち始めた太陽が斜めから橙色の光を自分達に投げかけている。バス停のベンチに腰掛ける、長い影が二つ。ストロベリーアイスクリームを口に運びつつ時折スプーンを揺らして嬉しそうに語る彼女と、ぢゅぢゅうっとレモンスカッシュをちびちび咽喉の奥に流している自分。

彼女はスプーンでアイスクリームを一口すくってリップでぷるぷるしている桜色の唇を可愛らしく開いて、苺色のアイスクリームをちびちび食べる。

細くて白い足をぷらぷらと遊ばせながら、また顔にえくぼを刻んで話の続きを桜色の唇の隙間ならあふれさせる。

「やっぱかっこいいよ、あいつ！　さすが、あたしの惚れた人っ！　なんてね」

もう、桃色の青春ロードを全力疾走してます、みたいな幸せな桃色オーラを振りまきながら彼女は少しはにかんでみせる。向日葵が咲き誇るような、満面の笑顔。見ている人も思わず笑顔になって幸せになれるような、裏表のない笑顔を彼女はごく自然に浮かべる。ああ、これが恋の力ってやつなんだなぁ。

そんな彼女に、自分はそっかぁ、と当たり障りのない言葉を返して口元に取り繕うような笑みを浮かべた。彼女とは反対に、裏表ありまくりの作り笑い。

半透明のストローを軽く加えて息を吸うと、半透明の隙間からうっすらとしたレモンイエローが上ってくる。しゅわしゅわ弾けてほんのりすっぱい味が舌を転がって、咽喉の奥に消えていく。

耳にさした音楽プレーヤーに接続したイヤホンから、鈴を振ったような澄んでいて可愛らしい声とともに甘酸っぱいラブソングが流れてくる。自分は無意識のうちに音量を上げていた。耳元で鳴るラブソングが大きくなって、反対に彼女の声が小さくなる。それが、どこか彼女が遠くに行った気がして、内心ほっとした。

彼女はただ今片思い中。相手はバスケ部の子で、そこそこかっこいいと思う。いや、間違いなくかっこいい。いつも彼のことを目で追いかけては、恋する乙女って感じできゃーきゃー言って嬉しそうに彼のことを語る。

それが、自分には辛い。彼女の話を聞いていると、大好きで仲のいい友達の恋を応援しているはずなのに、なんていうか、かっこよく言うと胸が締め付けられる。ぎゅぎゅうって心臓を握られて、その上微妙な力加減で痛めつけるように潰されているような。心臓の内側から一寸法師が針でつついてくるような、ちくちくとした痛み。

原因はだいたい分かってる。自分が彼を好きなだけ。三角関係だから。三角関係でハッピーなんて有り得ない。

「あたしもバスケ始めようかなー」

食べ終わったらしいアイスクリームのカップを脇に置いて、地平線へ吸い込まれていく夕陽を見ながら彼女が呟く。

大音量の音楽に隠れて聞こえ難い呟きをなんとか聞き取って、苦

笑と共にやめときなって、と声を投げ返す。
夕陽はもう地平線の彼方へ消えてしまいそう。まだまだと意地を張るように光を投げかける夕陽は太陽が一番輝くときなんじゃないかな、ってよく分からないことを思う。大分長くなった影とうっすらと紫が混ざってきた空を見て、自分はそろそろバスが来る頃かなって予想してみる。
案の定と言うべきか、すぐに田舎道にバスの大きなシルエットが浮かび上がってきた。
これ以上、胸がちくちくする話を聞かなくて済むと無意識のうちに肩の力が抜けた。よいしょっておばさんくさい声を出しながら重い鞄を引っつかんで立ち上がる。長い間座っていたからお尻が痛い。やっぱり、一時間に一本しか来ないような田舎のバスは駄目だな。
「あ、もう帰る？」
自分が立ち上がったことで自然と上目遣いになった彼女にこくりとうなずいて、耳からイヤホンを外す。音楽がだんだん遠くなって、じんわりと耳に馴染むように現実の音が鼓膜を揺らしながら入ってくる。
まだ残っていたレモンスカッシュを片付けようと、ストローをくわえて勢いよく流し込む。氷が解けてすこしだけ水っぽくなったレモンスカッシュ。でも、しゅわしゅわとした炭酸は健在で、舌や咽喉が痛い。
バスはゆっくり滑り込むように滑らかに停車して、ぶしゅーって音をさせながら扉が開く。
「じゃあ、ばいばーいっ」
バスで帰らないのに自分に付き合ってくれた優しい彼女は立ち上がって、にかっと星が飛びそうなくらい元気な笑顔と共に大きく手を振ってくれる。
自分もそれに応えるように手を振って、駆け足でバスに乗り込んだ。自分が乗り込むと、すぐにまたぶしゅーって音をさせて扉が閉まる。彼女と自分との間に薄汚れたガラスの壁。

適当に空いている席にずぼって腰かけて、もう一度彼女に手を振る。途中でバスがゆっくりと動き出して、彼女のシルエットがだんだん小さくなっていく。
彼女のシルエットが大分小さくなってから、プラスチックのコップの底に残っていたレモンスカッシュを吸い上げる。
しゅわしゅわとはじける炭酸とほんのり酸っぱい、うっすらとレモンイエローの色がついた清涼飲料水。

まるで、三角関係みたいだ、なんてポエマーみたいな意味の分からないことを思う。
甘いようで酸っぱくて。しゅわしゅわと新鮮な感覚の中に痛みがあって。
そう、レモンスカッシュみたいな。
青春もきっとそうだ。
自分と彼女と彼。三角関係はレモンスカッシュ味。

（後書き）

作者自身、何を伝えたいのか不明↑

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3234m/

三角関係はレモンスカッシュ味

2010年10月8日14時20分発行